

2021 年度 事業報告書

はじめに

1) 外国語電話相談	1
2) HIV 陽性者等のための多言語での個別支援	2
3) グループプログラム	6
4) 多言語支援	9
5) 実習生・研修及び受け入れ	15
6) 広報	15
7) 理事会	15
8) 会員総会	16
9) 事務局	16
10) 会勢	17
11) 寄付者一覧（敬称略）	17

決算報告



はじめに

新型コロナウイルスの流行が続くなか、CHARM は 2022 年に 20 周年を迎えます。



コロナ禍でこれまで対面で行ってきたプログラムの実施が難しくなった反面、この状況だからこそ生まれた工夫やプログラムもあります。年一回の女性 HIV 陽性者の集まりは隔月のオンラインミーティングになり、これまでは遠方だったり、一泊二日の日程だと都合がつかず参加できなかった人たちも参加できるようになりました。また、コロナ禍でも人と交流する機会を提供し続けたいと始まった「Social Connection - つながり -」。毎月行われているこのオンラインプログラムは CHARM に関わった人であれば誰でも参加できます。話題提供者や参加者と話すことを通してこれまであまり知らなかったことを知り、これまでは出会えなかった人とも出会える場となっています。このような小さな気づきや人との緩いつながりはすぐに何かのアクションにつながるものではないかもしれませんが、CHARM のミッションをより多くの人と共有することができる機会でもあり、CHARM にとってはこれまでとは違った視点を提供してもらう機会になっていると感じます。

20 周年の今年から来年にかけていろいろなプログラムが予定されていますが、これまで CHARM に関わった人や新たに関心を持つ人がつながる場となり、すべての人が健やかに暮らせる社会をつくるために、多様な人たちと CHARM が協働できるきっかけになることを願っています。

川名奈央子(CHARM 理事)

● 2021 年度 CHARM 事業報告書

1) 外国語電話相談

外国語によるエイズ電話相談

活動開始年：2002 年
目的：日本語以外の言葉を話す人たちが理解できる言語で HIV、他の性感染症についての相談、検査や診療に関する情報を得る機会を提供するために 5 言語で電話による相談を行っている。
頻度：毎週火曜日 スペイン語、ポルトガル語、英語、16:00-20:00 水曜日 中国語 16:00-20:00 木曜日 フィリピン語、英語 16:00-20:00 (フィリピン語対応は 2022 年 3 月末で終了)
委託元：大阪府、大阪市

2021 年度は 152 件の相談を受けた。2020 年度の 207 件より 55 件少なくなった。コロナ禍における新規外国人の入国制限による影響だと思われる。

言語別相談数は英語が一番多く 71 件(昨年度より-3 件)、日本語 22 件(-14)、スペイン語 21 件(+11)、ポルトガル語 20 件(-31)、中国語 4 件(-8)、タイ語 3 件(-10)、フィリピン語 2 件(-4)、その他は医療機関 9 件(+4)だった。

なお、2021 年度で外国語によるエイズ電話相談のフィリピン語対応を終了し、木曜日は英語相談のみを行う。フィリピン語は事務局内で必要に応じて対応する。

2021 年度 対応言語及び件数

月 言語	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	年間 合計
英語	2	7	10	4	1	12	11	6	3	4	4	7	71
日本語	4	1	0	1	0	5	0	3	2	1	3	2	22
スペイン語	1	2	2	1	2	3	4	2	1	2	1	0	21
ポルトガル語	2	3	2	1	2	0	1	0	3	1	5	0	20
中国語	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	4
タイ	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
フィリピン語	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
医療機関	0	0	0	0	2	1	1	1	0	1	3	0	9
合計	10	17	14	7	9	22	17	12	9	9	17	9	152

相談内容については、件数の多い順番として「HIV 陽性者(以下陽性者)そのほか(45 件)」、「HIV に関する情報(33)」、「陽性者の不安・心理的問題(32)」だった。特に「陽性者そのほか」が 2020 年度より 1.5 倍増え、コロナ禍に関連する内容が 1/3 程度を占め、ワクチン接種に関することやコロナ濃厚接触者になった等の内容だった。

2020 年度と比べると「行政手続きの方法」、「医療機関の紹介」、「陽性者が利用できる社会福祉制度、医療費、薬価に関すること」、「外国語の通じる抗体検査会場の紹介」が少なくなった。これは新規入国する外国人が減り、新しく医療機関等に関する情報を求める相談者が減ったことによると考えられる。

2021 年度 相談内容(複数回答あり)

月 内容	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	年間 合計
外国語の通じる抗体検査会場の紹介	1	0	1	1	1	0	1	3	1	0	1	0	10
外国語の通じる医療機関の紹介	1	4	4	0	1	0	2	2	0	0	1	0	15
行政手続の方法	0	5	1	0	0	4	1	0	0	4	1	1	17
性感染症、婦人科系の問題	2	0	1	0	1	0	1	1	0	2	1	0	9
HIV に関する情報	2	2	3	2	2	6	4	4	2	0	4	2	33
陽性者の症状、薬の副作用	1	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4
陽性者の社会福祉制度、医療費、薬価	1	2	3	0	0	2	3	1	1	1	1	0	15
陽性者の不安、心理的問題	2	5	5	1	0	6	2	2	4	1	3	1	32
海外の HIV 診療事情、受入れ機関紹介	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	1	6
陽性者 その他	3	4	3	3	3	5	8	1	2	4	4	5	45
医療機関紹介	2	4	0	0	1	1	2	2	1	1	2	2	18
NGO/NPO 紹介	1	0	0	1	1	1	2	0	0	2	0	1	9
HIV を含む性感染症への不安	0	0	0	0	0	4	0	2	0	0	1	1	8
その他	0	2	0	0	2	2	0	1	0	0	1	1	9
合計	17	28	23	8	13	31	26	20	11	15	23	15	230

2) HIV 陽性者等のための多言語での個別支援

2-1) 多言語対面相談

2021 年度に行った個別相談で特徴的であったものは以下であった。

・難民申請中の HIV 陽性者

2020 年度から継続の難民申請者を 2 人支援した。医療費は、難民事業本部を通して厚生労働省、外務省が支援しているが難民申請を開始してから 2 年目を迎え、先の見えない仮放免状態に対して起こる精神的ストレスを個別の相談で対応した。

・コロナ感染症に関する問い合わせ

HIV 陽性者は、自らが基礎疾患を持っていることを理解しているためコロナ感染症に罹患しないように人との接触をできるだけ避ける行動をしている。しかし外国人の多くは、在宅勤務ができる業種ではなく、それまでと同じように働かざるを得ない状況の中でコロナに感染した人もいた。中には医療機関を受診する時期が遅く救急搬送されて重篤な肺炎を患った人もいた。濃厚接触者と指定された外国人 HIV 陽性者は、複数人おり、指定された宿泊施設や自宅で保健所からのフォローも情報もなく不安の中にあった人に対して電話とメールで受け止めをした。

・失職、新天地への移動、転院、転出転入手続き

外国人 HIV 陽性者の 2 人がコロナ禍失職し、他府県への転出転入手続き、転院などを支援した。不当な解雇に関しては精神的打撃が大きく電話とメールで継続支援をした。同時期に職探し、引越しなどを行う必要がある状況の中で転出、転入、転院に関する手続きの援助を遠隔で行った。

・在留資格のない外国人のコロナ感染症ワクチン接種の問題

在留資格のない外国人に対するワクチン接種が各地で拒否されたという連絡が関係する NGO から続いて寄せられた。これらのケースについては、自治体や保健所に交渉を行い接種につなげた。厚生労働省は、すべての人にコ

コロナのワクチンを接種する方針を打ち出しているが、方針が浸透する通達が行っておらず自治体の判断に委ねている。自治体や保健所も各区窓口に通達はしないため、兵庫県、大阪府などでは拒否されるたびに交渉を行った。

2-2) HIV 陽性者の訪問、同行支援「そよかぜ」

活動開始年：2015 年

目的：高齢となる陽性者や複数の疾患のある陽性者が安心して地域で生活し続けるために、介護保険等によるサービスがカバーしない支援が日常的に必要なため。そのような場面で長期的支援を提供することを通して信頼関係を築き、助けが必要な時に頼める存在となることを目指す。

活動内容：エイズ拠点病院や訪問看護ステーションと連携して一人で暮らす陽性者が必要とする支援を行いながら関係性を構築する。介護保険など公的支援が適応しない支援の中には拠点病院への同行、入退院の援助、散歩や買い物等の同行などがある。

メンバー：5 名がボランティアで活動している。コーディネーター 1 名。

開催頻度：必要に応じて随時

2021 年度は緊急事態宣言による自粛のため、オンラインミーティング 2 回のみの開催。

委託元：厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援一式

そよかぜは、独居の HIV 陽性者が自立できるように経過訪問支援などを行っている。エイズ拠点病院や訪問看護ステーションなどと連携して、介護保険などの公的支援が適応しない支援を提供している。メンバーは 6 名で助産師、保健師、看護師、ソーシャルワーカーで構成されており、3 名はボランティアである。

コロナ禍でのそよかぜの訪問支援対応件数は、2020 年 20 件、2021 年 30 件と 10 件増加している。2021 年度のそよかぜ支援活動内容は HIV 内服薬の中断者や HIV 陽性者の覚せい剤使用者、独居、高齢化による初期の認知機能障害、入院時の荷物を運ぶ、入院中の飼い猫の世話、食料支援相談窓口への同行、国民保険減免相談、生活保護相談の同行などであった。

独居の HIV 陽性者の主な症状は、身体機能低下、既往症の増悪、認知機能障害の出現と高齢に伴う諸問題が多い。

また、独居の HIV 陽性者は、身近に頼れる人がいない人が多い。緊急時に備え、他人に迷惑をかけないようにと、常時玄関の鍵をかけない方もおられる。相談する人がいないため孤立によって引き起こされる解決の糸口が見つからない負の連鎖、生きることに對して「もうどうでもよかった」と服薬の自己中断を行った人、薬物の過剰摂取により亡くなった人など様々な問題があった。孤立しがちな独居の HIV 陽性者が一人ではないことを実感できるように、寄り添いながら支援していきたい。

2021 年度は多様な問題に向けて、エイズ拠点病院のみでなく、訪問看護ステーションや地域の支援団体とも連携を図りながら、少しでも自立した生活が出来るような支援を行った。

そよかぜ内の情報共有はコロナ禍による感染自粛も重なり、各自が訪問後にメールをして問題解決に向けた意見を交換した。相談員間のメール連絡は 28 回であった。

スタッフ間の会議は年に年度途中で 1 回と年度末に 1 回計 2 回オンラインで行った。それぞれが意見を出し合い、支援者の問題を明らかにしながら支援方法を振り返り改善に向けた検討を行った。

2022 年度も支援者の個々に合った健康維持や自立支援、安心に繋がるような支援、例えば病院や買い物の同行、緊急入院時の荷物の運び、相談相手などを行いながら、気兼ねなく頼れる支援活動を行ってきたい。

2-3) HIV 陽性者総合相談窓口「SO SO SO」

活動開始年：2021 年 10 月

目的：

- 1) HIV 陽性者やその家族が情報を得たり相談したいときに、時間に関係なく相談できるメールサービス。
- 2) CHARM で活動している専門家も含めた人々がその能力と才能を発揮し、相談者のニーズに近い対応をチームで行う。

メンバー：医師、薬剤師、臨床心理士、ソーシャルワーカー、看護師、陽性者の方など

開催頻度：必要に応じて随時

委託元：厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援一式

陽性者への総合相談窓口「SO SO SO」を 2021 年 10 月より開始した。対象は告知を受けた陽性者、その家族やパートナーである。独居高齢者からの相談、HIV を理由とした差別・偏見の相談、陽性者との面談を希望する人への対応、依存症の問題を抱える人への対応、インターネットなどで情報は多いが、信頼できる相談先がどこかが見えない。HIV に関して、時間に制限なく専門職に相談できる窓口として育てていきたい。

相談の手順としては、メールで受け取った相談内容をコーディネーターが受け止め、希望に応じて医療者、薬剤師、MSW、看護師、臨床心理士、陽性者の方、弁護士などとチームで対応するシステムである。

初年度は、サービスを知らせる広報資材を作成して関西地区を中心に各府県ブロック/中核拠点病院、薬局、保健所等に配布した。

相談員の募集と研修は、CHARM で活動する医療従事者や HIV 陽性者に企画の主旨、目的、体制などについてのオリエンテーションを行った。相談員の募集は継続して行っている。

2021 年度後半の相談件数は半年間で 4 件であった。相談内容によってはメールのやり取り回数は相談 1 件につき 8 回や 13 回に及び、相談者は複数の問題を持ち、悩んでいたことがわかった。相談の種類は、陽性者の方に相談したい、HIV 陽性と最近わかったこれからどうなるのか不安、その他として、薬の副作用について、HIV/AIDS の正しい知識、女性交流会希望、親子関係について、お金の管理、医療者との付き合い方、性についてであった。相談内容によって対応者を考え、薬剤師、MSW、看護師に繋ぎ問題解決に至った。相談者の中には、HIV/AIDS のことを理解できたことで、両親に自分の病気を打ち明けることが出来たとの報告を受ける事例もあった。2022 年度は、広報活動を再度広範囲の医療機関に向けて実施し、相談しやすい体制を整えながら、相談者が前向きに進める一歩となる支援活動を進めていきたい。

2-4) HIV 医療などの情報提供

2021 年度は CHARM のホームページの問い合わせフォームを利用した問い合わせの中で HIV 関連の内容のものが 54 件(2020 年度 62 件)あった。

問い合わせで使用された言語は英語が最も多く 22 件(約 40%)、日本語 10 件、インドネシア語 6 件、ベトナム語 5 件、ポルトガル語 5 件、中国語 3 件、スペイン語・タイ語・フィリピン語それぞれ 1 件だった(図 1 参照)。

問い合わせのアクセス元は海外からが一番多く 27 件(50%)、続いて国内の外国人 9 件、そして国内の医療機関 1 件、国内(その他)9 件、不明 9 件だった。

問い合わせに対して提供した情報などは、日本の健康保険制度等に関する説明が 36 件(約 66%)、日本の HIV 診療に係る情報の提供が 35 件(約 65%)であり、この 2 つの情報提供に集中していたことがわかる。この 2 項目以外の情報提供は、HIV 感染症に関する医療情報が 5 件、海外の HIV 医療情報に関する情報が 3 件、陽性者支援事業についての情報が 3 件、検査情報 2 件、通訳派遣事業の情報が 2 件、医療機関情報 1 件だった(複数回答)(図 2)。

2021 年度は、前年度に引き続きコロナ禍の影響で入国制限による新規入国の外国人が少なかったが、入国

制限措置解除を見据えた入国準備に関する問い合わせが多く含まれているため、今後は来日前の外国人陽性者にとって必要な情報を更に拡充させ、また情報へのアクセスがよりスムーズにできるようホームページを再構築し、多言語による広報や情報発信を積極的に行う予定である。

図 1 問い合わせの言語

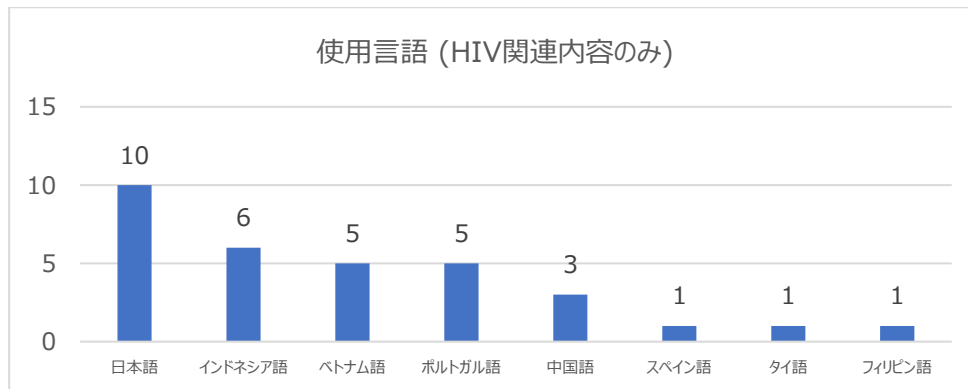
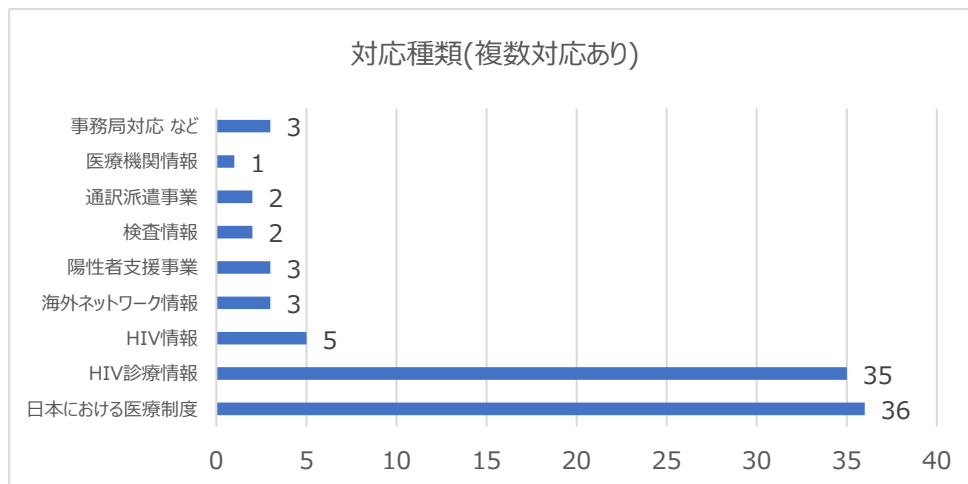


図 2 問い合わせた人の状況



2-5) エイズ専門相談支援事業(大阪市)

活動開始年： 2011 年

目的：

- 1) 大阪市内で行っている HIV 検査後に検査結果が陽性と判明した人にカウンセリングを行い、必要とする情報を提供することで、不安を軽減し診療に向かうことを目的とする。
- 2) 大阪市立病院で通院又は入院治療を受けている患者の要望に応じてカウンセリングを行う。
- 3) 中央区、北区の保健福祉センターで月 2 回ずつ HIV 検査時に受検者に HIV をはじめとした性感染症などの相談の機会を提供する。

登録カウンセラー：臨床心理士、ソーシャルワーカー、看護師 5 名

頻度：必要に応じて随時

委託元：大阪市保健所

2021 年は世界的なコロナ禍での COVID19 によるデルタ変異株、オミクロン変異株によって、大阪府も緊急事態宣言、自粛や解除の経緯の中、収束の目途は未だわからない状態である。そのような中、大阪市内での HIV 及び性感染症の検査は閉鎖せずに実施され、それに伴う定例専門相談、HIV 陽性告知時のカウンセラー派遣を実施した。

保健福祉センターの陽性告知件数は定例相談、告知を含めて年間 91 件であった。2019 年度は 96 件、

2020 年 85 件であったので、2021 年度は 6 件増加した。また、コミュニティセンター dista で行われている同性愛者のための HIV などの検査事業における陽性告知は 2 件であった。

大阪市立病院における HIV 陽性者のカウンセリングへのエイズ専門相談員の派遣は、27 件でその内新規者は 1 名であった。

相談員の連絡会議は年に 2 回で 10 月、3 月にオンラインでの会議を行い、相談件数や告知対応件数、告知時の現状、相談件数の減少原因や相談件数の減少から今後考えられる現状などの意見や情報交換を行った。

2-6) 和歌山県エイズカウンセラー派遣事業

活動開始年：2020 年

目的：和歌山県立医科大学付属病院にて、エイズ患者又は HIV 感染者及びその家族に対するカウンセリングを行う。

頻度：月 5 回

委託元：和歌山県

2020 年度に引き続き、和歌山県立医科大学付属病院にカウンセラーを派遣した。

2021 年度は月 5 回、計 60 回の派遣を実施し、対応件数が延べ 40 件だった。2022 年度は HIV 専門医がいる曜日のみに派遣依頼がされるなどの見直しがある予定である。

3) グループプログラム

3-1) 女性交流会

活動開始年：2007 年

目的：女性 HIV 陽性者が、同性の仲間と出会うことで孤立を防ぎ安心して暮らすことにつながる機会をつくる。

活動内容：年に一度 1 泊 2 日の多文化キャンプを実施し、ほかの女性 HIV 陽性者や医療者に出会う機会を作ってきた。2020 年度から形式をオンラインに変更している。

開催頻度：多文化キャンプは年に 1 回（新型コロナ予防対策のため中断中）

オンライン女性交流会は 2 ヶ月に 1 回（曜日、時間は不定）

委託元：厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援一式

2007 年から実施してきた 1 泊 2 日の「多文化キャンプ」は、COVID-19 の影響により 2021 年度も中止を余儀なくされた。しかし、キャンプに代わるものとしてオンライン女性交流会を 2 ヶ月に 1 回開催し、合計 6 回実施することが出来た。参加者は延べ人数 59 名で、そのうち外国籍女性 14 名、新規参加者は 4 名（うち外国籍 2 名）であった。内容については、参加者の希望により「コロナワクチンについて」をテーマに医療者と話す会を 1 回実施した他、近況報告とテーマを決めてディスカッション形式に行うものを 5 回実施した。生活や仕事、健康をテーマにしたものや、特に新規参加者では妊娠や出産について知りたいという意見もあり、今まさに出産・子育て中であるというメンバーから話をしていただいたこともあった。結婚や出産を諦めなければいけないと思う女性たちも多いが、実際に経験者の話を聞くことで将来への希望に繋がっているようである。

開催日程について、2021 年度は女性たちが比較的参加しやすい週末の夜に交流会を実施したが、それでも都合がつかず参加できないという声もあり、2022 年度は COVID-19 感染状況の推移をみつつ、関西地域限定にはなるが、対面で集まれる機会を設けることも検討している。

参加した女性たちからは「定期的に他の女性たちに会える機会があるのは嬉しい」「医療者から話を聞いたり、相談できたのが良かった」「他の女性たちと情報を共有できたのが良かった」という感想が聞かれた。オンライン女性交流

会を開始して2年目になるが、毎回10名前後の参加者に加えて新規の参加者がいることをみても、女性たちが集まる場・出会う場としての本プログラムのニーズは、以前と変わらず高いことがわかる。また年に一度のキャンプでは新規参加者は1～2名であったが、オンライン女性交流会では2021年度は4名であり、2ヶ月ごとに定期的に開催することが、参加しやすさにも繋がっていると思われる。

3-2) 薬物依存症からの回復を目指す陽性者のピアグループ「SPICA」

活動開始年：2012年

活動内容：陽性者で薬物依存症からの回復を目指す人たちが集まる仲間(ピア)のグループミーティング。HIV、セクシュアリティなど互いに理解し合える要素を共通にもつ仲間が、お互いを支え合うためにつながる場として月2回のミーティングがある。

開催頻度：月2回 第2日曜日、第4土曜日 16:00-18:00 に開催。

委託元：厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援一式

2021年度、月2回の集まりは24回開催した。参加者数は毎回1名から7名で延べ人数45名であった。メンバーの中で3名が服役していたため、ミーティング参加者は少なかったが、毎回のミーティングでは刑務所内にいるメンバーへの月一度の手紙書きが日常となった。仲間からの支えが受刑者にとって一番大きな支えになる。待っていてくれる仲間がいる、戻れるところがあるということが、回復につながっているということが実感された1年となった。またミーティングに初めて家族が参加した。母親が2回参加し、依存症の人の経験を聞く機会となった。そのことで親の心配や思いを他メンバーが知る機会にもなった。

また、遠方の刑務所で服役中の HIV 陽性者の息子の誕生日に訪問することを希望した外国人親に、スタッフが同行して息子との面会を実現させる援助をした。

HIV 陽性者の中には依存症に悩む人が少なくないため、今年度はグループの存在を知らせる広報資材を刷新し、グループが「ゲイ(男性同性愛者)」が集まる場であることを明確にした。2022年度に関西の医療機関にメンバーが分担して持参し協力を依頼する予定である。

以下は、2021年度のミーティングで取り上げたトピックである。

- ・薬物を使用することによる身体状態の悪化についてもっと知る必要がある。一般にも伝えられることが少ない。脳や歯への後遺症など長年苦しむ身体状況が生じる。
 - ・薬物使用初犯で勾留された初犯の人を助ける方法がないかを話し合う。
- SPICA や NA などのグループに参加して仲間と繋がることの重要性を強調したい。
- ・SPICA プログラム案内カードの改訂作業をミーティング内で数回行う。
 - ・ピア(仲間)ミーティングの意味は仲間とつながり続けること、仲間を信頼し、戻ってくるところをつくっておくことである。

3-3) オンラインミーティング

3-3-1) Social Connection -つながり-

活動開始年：2020年

活動目的：人とのつながりを積極的につくり HIV 陽性者が孤立することを防ぐ。医療者/患者、利用者/支援者などの属性を越えて人々が出会い、それぞれが経験している現実を知り意見交換をする機会とする。

活動内容：毎回のトピックに沿った話題提供と参加者の話し合い

開催頻度：毎月第2土曜日 15:00-16:30

委託元：厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援一式

2021 年度実施内容は、以下の通りである。

No	日付	テーマ	話題提供者	参加人数
1	4/10	新型コロナ感染症ワクチン どんなもの？	白野倫徳	17
2	5/8	とりあえずおとこをやめてみた	黒田綾	13
3	6/12	CHARM 会員総会	なし	49
4	7/10	難民申請中の外国人が病気になった時	難民申請者	15
5	8/14	大阪の HIV 透析受け入れ事情	瀧浦その子	16
6	9/11	安全な場所とは？ 多様性宣言を作成して貼り出すまで	藤井航、小野歩	20
7	10/9	キラキラネーム風ですがどうぞよろしく！ -ある在日 3 世の名前の経験-	徐淑子	12
8	11/13	無保険の移民・難民の人たちは医療サービスを受けられない？	中路綾夏	15
9	12/11	セクシュアルマイノリティ者にとっての避難所	岳中美江	10
10	1/8	依存症の不思議-身近な人はどう関わったら良いか？	ケン	17
11	2/12	LGBT フレンドリーな社会資源を広げていこう	桂木祥子	19
12	3/11	今年度の振り返り	なし	10
延べ参加者数				213

・2 月のプログラム終了時に同プログラムに参加した人を対象にプログラム内容に関してアンケートを実施し、16 人から回答を得た。アンケートから明らかになったことは、プログラムに参加した目的として多かったのは、他の人の意見を聞きたい、情報を得たいというものであった。そして Social Connection-つながり-に参加することによってその目的が達成されたと感じている人は、回答者の 87.5%であった。参加者が何を魅力にプログラムに参加しているのかの質問に対しては、距離が離れていても参加できるというものが一番多く、次いで色々なトピックがあって面白いという意見であった。

コロナ感染症による行動制限が緩和された後もオンラインプログラムがあれば参加するかについては、参加者の 62.5%が興味のあるトピックには参加すると答え、37.5%が人とのつながりのために参加すると答えた。オンラインで 2 年弱実施してきたプログラムは、参加者同士にとって安心して話ができる場となっていることが明確になった。2022 年度もオンラインによる同プログラムを継続することを決定した。

3-3-2) Cooking with Japan'ease ingredients 日本の食材で料理しよう

活動開始年：2020 年 9 月 活動終了日：2021 年 9 月
活動目的：日本で孤立しがちな外国人が楽しい食文化をテーマにお互いに又日本人ともつながる機会を持つ。
活動内容：日本で手に入る食材を使ったりリモートの料理プログラム。プログラムは英語と日本語で行い、英語話者を中心に登録した人は誰でも参加できる。
開催頻度：毎月第 3 水曜日午後 8 時から 9 時
委託元：厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援一式

「皆さんこんばんわ、前回からの 1 ヶ月皆さん何をしていましたか？」それぞれ、ワインやビールなどの飲み物を準備して、近況報告から始まる Cooking。会話は英語と日本語が飛び交う。

2019 年 9 月、日本に暮らす外国の人たちも新型コロナで大きな影響を受けた。言葉の障害による情報格差、外出自粛、母国との入出国など、異国で「孤独」を感じた人たちも少なくない。

このプログラムは、普通の料理教室とは違い、毎回乾杯で始まる。食材のテーマに合わせた料理のレシピを参加者ができる方法(ライブ動画、パワーポイント、スライドショー、YouTube)で紹介する。その料理にはその背景にある家庭や民族のストーリーがあり、興味深い。広報もInstagramを中心にを行い、CHARMのことを全く知らない人でも参加できる公開プログラムとした。

しかし、コロナ禍が収まり、また日々の感染対策にも慣れてきたこともあり、徐々に参加者数が減少、何度か話し合った結果、リモート環境が整わない外国人が参加するのがむずかしいこと、孤独からつながりへの役割はほぼ終えたと判断し、今年度上半期で終了した。リモートでのプログラム開催の可能性が広がり、次への貴重な経験となった。

No.	日時	取り上げた食材	参加人数(人)
1	4 月 21 日	とり肉	8
2	5 月 19 日	豆	9
3	6 月 16 日	春巻き	6
4	7 月 28 日	ズッキーニ	6
5	8 月 18 日	きゅうり	3
6	9 月 22 日	話し合い	3

4) 多言語支援

4-1) HIVと結核の通訳派遣事業

活動開始年: 2002 年 目的: 日本語以外の言語を背景とする人が、自分が理解できる言語で安心して診察を受けられるように、研修を受けた医療通訳者を医療機関、保健所などに派遣する。 活動内容: 1) HIV 通訳派遣 内容: HIV 陽性者の診療時、行政窓口やその他の手続きの際の同行通訳 委託元: 厚生労働省、医療機関 2) HIV 検査時通訳 内容: 自治体や NGO が行う HIV 検査、結果返しの際の通訳(対面、遠隔) 委託元: 京都市、MASH 大阪、スマートらいふネット、大阪市 3) HIV 陽性と判明した場合の告知、カウンセリング通訳派遣 大阪府外国人 HIV 陽性判明者に対する医療通訳者派遣事業 委託元: 大阪府 4) 結核通訳派遣 内容: 結核感染者の受診、接触者検診、DOTS 指導、濃厚接触者等に関する聞き取りの際の保健師と患者の間の通訳、資料翻訳(一部自治体) 委託元: 大阪府、大阪市、堺市、八尾市、寝屋川市、枚方市、吹田市、高槻市、京都市

5) 感染症以外の通訳派遣

内容：母子保健関連、感染症関連等

どうしても通訳派遣が必要と思われる事案について、医療機関、行政、CHARM 財源で通訳者を派遣

6) 医療通訳研修

内容：登録通訳の知識更新のため、また新規の通訳者採用前の基礎知識習得のために実施

登録通訳者：81 名、16 言語

4-1-1) HIV 通訳派遣

2021 年度は外国語の HIV 診療時等の通訳を 31 人に対し、延べ 127 回派遣した(2020 年度 115 回)。

HIV 診療時の通訳派遣は大阪医療センターへの英語の派遣回数が増加し、それ以外の医療機関からの依頼が前年度より減った。島根大学医学部付属病院、福井県立大学附属病院、宝塚市役所などとは電話を使った、都立駒込病院とは ZOOM を使った遠隔通訳を行った。

言語別に見てみると、英語とタイ語の依頼が増加し、中国語は減少した。英語とタイ語は 1 人で感染症内科だけでなく、糖尿病内科、外科、消化器科など複数の診療科を受診する患者が複数名いるためである。患者が新型コロナウイルス感染症に感染したり、濃厚接触者になったり、帰国後再来日の予定がずれたりするなどして、予定変更せざるを得ないケースが何件か発生した。

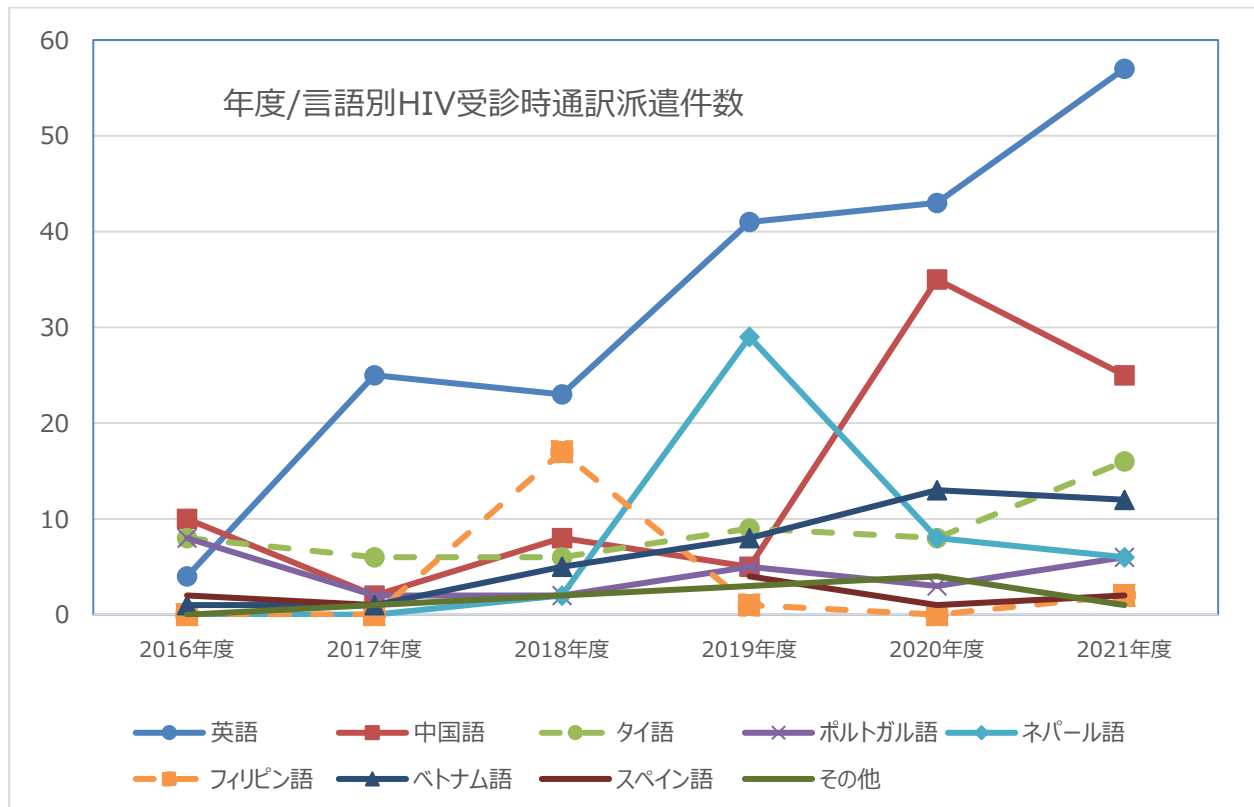
2019 年末から 2022 年 3 月まで約 20 回派遣した人が帰国した。陽性告知から、体調/体重管理、帰国のための診療情報提供書の作成、帰国直後の隔離期間を考慮した日数の薬の処方まで、医療機関の医療者、MSW 等と連携して対応した。病気について職場に知られることなく安心して受診できるように包括的な支援を行うことができ、CHARM の役割を果たせたケースの 1 つとして報告する。

2021 年度 HIV 関連の通訳派遣実績(件数)

		英語	中国語	ネパール語	ベトナム語	スペイン語	タイ語	ポルトガル語	フィリピン語	前年度比
HIV 診療	大阪医療センター	33	15		6	3	15		1	+36
	大阪市立総合医療センター	10			1					-3
	堺市立総合医療センター		4		5					-7
	兵庫県立尼崎総合医療センター			6						-13
	明和病院	6								+6
	島根大学医学部付属病院							4		+4
	中村クリニック	4								+2
	その他の医療機関	2	6						1	-14
行政機関		2							1	±0

その他	自宅など							1		-3
	合計	57	25	6	12	3	15	5	3	+8

(合計 126 件)



2016 年度から英語の通訳派遣が増加している。英語は母国語とする人だけでなく、第 2 言語、第 3 言語とする人からの通訳依頼が多く、2021 年度、英語を派遣した依頼者の国籍は、カメルーン、フィリピン、ジャマイカ、ジンバブエ、チュニジアなどであった。

4-1-2) HIV 検査時通訳

大阪市定例 HIV 検査後の陽性告知時、保健福祉センターで実施されている定例 HIV 検査後の陽性告知時に英語の通訳を 1 回派遣した。

- ・chotCAST：2021 年度も 8 月以降、月 1 回通訳付き外国人検査日に英語と中国語の通訳者が待機、必要に応じて通訳を実施。また、今年度からインターネットを使った予約システムが稼働し始め、通訳付きの定例検査日ではない日でも言語で中国語を選んだ人に対して、通訳を希望した受検者に通訳を実施し、今後のよりよいシステム構築に向けた試みとなった。通訳形態は、受検の際は中国語と英語で Zoom を使った遠隔映像通訳を、結果返しの際は対面通訳または遠隔映像通訳であった。
- ・dista でピタッとちえくん：MASH 大阪が実施しているコミュニティセンターdistaでのゲイ・バイセクシュアル向けの HIV 検査において Zoom を使った遠隔映像通訳を行うため英語、中国語の通訳者が待機、英語通訳を 1 回実施。検査後の陽性告知では英語通訳者を 1 回派遣した。
- ・京都市夜間検査：新型コロナウイルス流行の影響で休止されていた京都市 HIV 夜間検査が 4 月より場所を京都駅前の利便性の高い場所から右京区に移動して再開した。2019 年 93 件だった派遣数が、2020 年度は 5 件となっていたが、再開後の 2021 年度は 11 派遣、通訳は延べ 16 回行った。場所が京都の中心地から少し離れた場所に変わったこと、検査時間が 1 時間早くなったことなどもあり検査数は 2019 年度並みには

戻らなかった。しかし、英語での広報を積極的に行っていることもあり、月曜検査が定着し認知度が上がれば 2022 年度は受検数が増加することが期待できる。

	派遣先	英語	中国語
HIV 検査	京都工場保健会	16	0
	dista キャンペーン検査	7	6
	chotCAST	8	14
	大阪市保健所陽性告知	1	0
	HIV 検査関連派遣合計	32	20

(合計 52 件)

4-1-3) 大阪府が契約した医療機関

大阪府が契約した医療機関で、HIV 陽性と判明した場合の告知、カウンセリング時に医療通訳を期間限定で派遣する事業を受託したが、依頼はなかった。

4-1-4) 結核通訳派遣

2021 年度の結核通訳は 6 つの自治体から計 48 件(2020 年度は 40 件)の依頼があり通訳派遣を実施した。通訳を必要としたのは病院に入院中の患者への説明、保健福祉センターでの接触者検診の説明、自宅での DOTS 指導などの保健師とのやりとりの場面であった。大阪の中心地に所在する大阪市立病院機構十三市民病院呼吸器科が新型コロナウイルス感染者のみを受け入れていた時期があったため、遠方の病院を受診せざるを得ないケースがあった。また、患者が治療を継続することを拒否したケースが 2 件あったが、1 件は通訳者が介入し始めた後に治療を継続することへの意欲が芽生え、在宅治療で治療を再開し、培養検査 3 回陰性まで回復した。

2021 年度結核通訳派遣実績(件数)

依頼先	派遣先	英語	中国語	フィリピン語	ネパール語	ベトナム語	スペイン語	ポルトガル語	インドネシア語	タイ語
大阪市	旭区保健福祉センター				1					
	阿倍野区保健福祉センター					1				
	生野区保健福祉センター					1				
	西区保健福祉センター					1				
	西淀川区保健福祉センター					3				
	東成区保健福祉センター	1		1						
	生野区保健福祉センター					2				
	大阪はびきの医療センター					2				
	近畿中央呼吸器センター				1	1			2	
	大阪複十字病院						2			
	その他の医療機関	1			1	2			1	
	日本語学校								1	
	患者自宅/近所		1			1	3	2	1	1

	職場		1			2				
吹田市	吹田市保健所				1					
八尾市	近畿中央呼吸器センター		1							
枚方市	済生会吹田病院					1				
寝屋川市	大阪複十字病院								4	
大阪府	大阪複十字病院								3	
	JR 星田駅								1	
	結核関連派遣合計	2	3	1	4	16	6	2	13	1

(合計 48 件)

4-1-5) 感染症以外の通訳派遣

感染症以外の通訳派遣は医療制度について説明する際の通訳、寄生虫の治療に関する通訳、医療機関からの依頼で COVID-19 に関わる通訳、子どもセンターからの依頼で母子に関わる通訳、個人からの依頼で家庭裁判所での通訳等計 15 件を実施した。

大阪府下の府立病院機構を含めた、いくつかの医療機関における医療通訳利用状況、府下の医療機関が利用できる NPO などが提供している医療通訳サービスについて調査を実施した。外国人患者が多数受診している医療機関では、医療通訳を雇用したり、NPO や企業と契約して通訳者を準備したり遠隔映像通訳を利用したり、府の電話による多言語遠隔医療通訳サービスを利用したりしている現状が見えてきた。1 つの医療機関が状況に応じてそれらのサービスを使い分けていることもわかった。

2022 年度は実際に通訳依頼を受けてわかったこと、上記の調査からわかったことを踏まえ、HIV や結核以外の疾患において多言語で治療を受けられるための医療通訳派遣のあり方について医療機関関係者と共に検討を進めていく予定である。

4-1-6) 医療通訳者研修

HIV／結核通訳研修の通訳養成講座を開催し、4 日間の通訳研修を行った。

2021 年度は、2019 年度から続いて杏林大学北島勉氏を代表とする研究事業¹の一環として関東の研究者、医療者の協力を得て実施した。

研修日程：1) 8 月 7 日 13:00-17:00 2) 9 月 4 日 13:00-17:00
3) 10 月 2 日 13:00-17:00 4) 10 月 30 日 9:30-17:00

目的：新しい医療通訳者の養成、すでに登録している通訳者へのフォローアップ

言語別研修参加者：英語 8 人、英語/フランス語 1 人、中国語 8 人、ネパール語 1 人、タイ語 1 人、フィリピン語/英語 1 人、ベトナム語 3 人、中国語/英語 2 人、中国語/広東語 1 人、中国語/モンゴル語 1 人、韓国朝鮮語 1 人、スペイン語 1 人、延べ 113 人

☆研修後に新規登録した通訳者は 12 名だった(英語 3 人、英語/フランス語 1 人、中国語 3 人、ネパール語 2 人、スペイン語 2 人、ベトナム語 1 人)

研修形態：新型コロナウイルス流行の影響を受け、Zoom による遠隔研修となった。

¹ 厚生労働省 HIV 検査と医療サービスへのアクセス向上に資する多言語対応モデルの構築に関する研究班・研究事業、研究代表杏林大学総合政策学部教授北島勉



- 内容 : 1) 医療通訳に必要な結核・エイズの基礎知識
 2) 医療通訳者のための制度案内、医療通訳者の職業倫理、ケーススタディ
 3) 新型コロナウイルスと外国人への支援、通訳技法、通訳基礎トレーニング
 4) 感染症通訳のための実技演習
 演習実施言語：ベトナム語、英語、中国語(その他の言語通訳者は見学)
 演習場面：結核と HIV に感染した患者とソーシャルワーカーとの間の通訳

業務委託を受けたことで、単独での実施時より講義数を増やすことが可能となり、また関東で活動している講師や話題提供者の紹介を受け、協力してもらうことができた。ロールプレイを実施する言語は、通訳者を必要とする言語で行っていたが、2021 年度は受講者が希望する言語で実施。今回もほめて通訳者の意欲を高める手法を採用した。

4-2) 翻訳

行政機関や陽性者本人等から HIV や結核などに関連する資料等の翻訳の依頼があり、対応した。
 実績は下記の通り。

依頼元	内容	言語
HIV 検査会場 (大阪)	検査予約システム ホームページ 検査予約関連	日本語→英語 日本語→英語 日本語→英語、中国語
自治体	結核患者向けの資料・予約等について	日本語→英語、中国語、フィリピン語、ベトナム語、インドネシア語、ネパール語
支援の陽性者	裁判提出書類	日本語→英語
自治体	結核患者向けの資料・DOTS 計画書等	日本語→英語、中国語、フィリピン語、ベトナム語、インドネシア語、ネパール語、ミャンマー語、韓国語
自治体	HP の外国籍住民対応	日本語→英語、中国語、ベトナム語
民間企業	管理物件内の住民向け資料	日本語→ネパール語 * 陽性者支援ではない依頼。
自治体	結核関連資料	日本語→英語、中国語、フィリピン語、ベトナム語、インドネシア語、ネパール語、ミャンマー語、韓国語
CHARM 内部	HP へのお問い合わせ内容	日本語↔インドネシア語、中国語

5) 実習生・研修及び受け入れ

日時	主催機関・対象者	実施内容	参加者数
5月1日～ 2022年1 月31日	同志社大学社会学部 社会福祉学科	社会問題実習 「HIVに関する地域のソーシャルワーク」	1名
7月26～30 日	大手前大学国際看護学科	HIV 陽性者の生活支援についての現場実習	3名
9月16日	大阪大学医学部実地研修	施設見学と講義 日本に暮らす外国人の状況と CHARM の 陽性者支援	6名
10月6日	大阪市立総合医療センター	地域で HIV 陽性者を看る訪問看護ステーションの看護師と の意見交換	4名
10月20日	大阪医療センター HIV 感染症医師研修	施設見学と講義 日本に暮らす外国人の状況と CHARM の 陽性者支援	医師 2 名

6) 広報

6-1) 10 言語ホームページ、SNS での情報発信

ホームページにて実施予定のイベントや検査情報等の発信を行った。それに合わせて、SNS アカウントでもわかりやすい日本語、その他の言語で発信し、情報が届くように工夫を行ったが、2021 年度のホームページの閲覧数の年間平均は 7,400/月にとどまった(2020 年度 11,281/月)。2022 年度以降はスマートフォンやタブレットなどでも見やすいようにホームページの改定、そして SNS をもっと活用する予定。

6-2) CHARM からの情報発信

CHARM にかかわるすべての人を「CHARMER」とし、事業やイベントの案内を 2020 年 10 月から月 1 回配信した。

また、機関紙である Charming Times の発行を 1 回行った。団体の機関紙は、一般に公開し、誰でも、どんな端末からでも閲覧しやすいように HP に文章を掲載した。電子版を活用することで、写真、イラスト等をふんだんに使うことができ、読みやすいように工夫した。一方、PDF 版もホームページからダウンロードできるようにし、インターネットにアクセスが難しい人のために紙媒体の印刷に対応した。

7) 理事会

理事長 松浦基夫

副理事長 武田丈

理事 中萩エルザ、白野倫徳、福村和美、川名奈央子、エレラ・ルルデス・ロザリオ

監事 三保俊幸

今年度は、3 回の会議を開催して協議検討を行った。

・第一回理事会

日程：2021 年 5 月 23 日 10:00-12:00 参加 理事 7 名、事務局 1 名

議案：1) 2021 年度の事業計画と予算…承認

2) CHARM の支援者を増やすための工夫、コングラントの活用…承認

3) CHARM 20 周年プレイベントの実施に向けて

検査結果説明、10 言語パンフレットの完成と発表…承認

・第二回理事会

日程：2022 年 1 月 10 日 10:00-12:00 参加 理事 7 名、監事 1 名、事務局 7 名

議案：20 周年を迎えるに当たり理事会と事務局が合同で協議を行い以下の取組を行うことを決定した。

1) CHARM に関する歴史と変化を可視化する。

2) CHARM 関わってきた人が集うホームカミングデーの開催

3) CHARM の存在を知らせる国際フォーラム、市民フォーラム

4) CHARM の次なる展望を見出す。

・第三回理事会

日程：2022 年 3 月 21 日・10:00-12:00・参加 理事 7 名、監事 1 名、事務局 2 名

議案：1) 2021 年度の事業総括…承認

2) 人事…承認

3) 20 周年記念事業の方針と担当理事の決定…承認

4) 2022 年総会

日程：2022 年 6 月 25 日 15:00-17:00

開催方法：zoom

5) 2022 年度事業計画と予算…承認

8) 会員総会

日時：2021 年 6 月 12 日(土) 15:00-17:00

手段：zoom によるオンライン開催

出席：正会員 38 名のうち 29 名が書面決議 当日オンライン出席者 34 名(内傍聴 14 名)

議事：2020 年度の事業報告及び活動決算について…承認

2021 年度の事業計画及び活動予算について…承認

活動報告：スタッフ、メンバーから 7 つの事業について報告がなされた

2021 年度に向けた提案

1) CHARM 設立 20 周年を迎えるにあたりフォーラムや集会を開催する予定。

2) HIV 総合相談窓口 SO SO SO を 10 月から開設する。

3) CHARM の賛同人を広げるとりくみへの協力依頼

9) 事務局

青木理恵子 (事務局長、理事会、総務、SPICA、陽性者個別相談)

庵原典子 (通訳派遣事業)

ブラーボンキワラシ (広報全般、外国語によるエイズ電話相談、オンラインプログラム)

オンバダ香織 (女性陽性者交流会)

前田圭子 (会員管理、オンラインプログラム)

松原光与 (会計、総務)

三田洋子 (エイズ専門相談、そよかぜ、HIV 総合相談窓口 SO SO SO)

2020 年度に引き続き事務所での業務を行うことが難しい時期が続いたため、各分野のコーディネート業務及び事務は自宅で行った。CHARM の活動の共有と組織の課題については、月一度のスタッフミーティングで協議を行い 12 回の会議を開催した。月 1 回の会議以外に小グループミーティングを積極的に開催し、少人数で意見交換を行い、スタッフミーティングに提案するたたき台を作ることで協議の機会を増やした。2022 年度に CHARM が設立 20 周年を迎えるため、年度後半は 20 周年記念事業に関する協議を行い、2022 年 1 月には理事会との合同協議を行った。

10) 会勢

会員数 108 名 (前年比 +8 名)

〈内訳〉

サポーター(賛助)A 34 名

サポーター(賛助)B 34 名

正会員 38 名

法人・団体サポーター 2 (10 口)

11) 寄付者一覧(敬称略)

○寄付 個人

青木理恵子、荒巻富美、ありす、伊藤悠子、伊藤理枝来、岩元隆一、岩元美和子、植田恵美、宇野健司、織田幸子、オンバダ香織、来住知美、北岡由美、小林直子、小柳ゆみ子、重岡奈津子、白野倫徳、鈴木雅子、関祥子、田井英子、高井明子、岳中美江、伊達直弘、田守敏樹、崔金順、東條麻実、豊島裕子、成田美和子、成田康子、新倉久乃、堀博伸、マーサメンセンディーク、前田佳壽美、前田圭子、松浦千恵、松野周治、三田彰、三田洋子、宮本久子、村松紀子、もえ、森重裕子、山口和子、米本キャサリン、匿名 6 人

○寄付 団体

日本基督教団 大正めぐみ教会

日本基督教団 池田五月山教会

日本基督教団 京都上賀茂教会

京都ワイズメンズクラブ

